



中正記念堂「自由の花」常設展—民主・自由を求めつづける台湾

中正記念堂の「中正」は、中国大陆での国共内戦に敗れて1949年に台湾へ撤退し、その後、反転攻勢を画策しながら果たせないまま1975年に台湾で没した蒋介石の諱である。建物の4階には巨大な蒋介石の銅像が鎮座しているが、同じ施設内で「自由の花」と題するこの常設展がおこなわれていることの意味を、ごらんになる方々にはまず考えていただきたい。

台湾は1945年に日本の植民地統治を脱したものの、代わって台湾を統治することになった国民政府の汚職体質や経済政策の失敗などに台湾人の不満が爆発し、それが武力によって弾圧された。民衆の蜂起が1947年2月28日だったことから、後に二二八事件と呼ばれたこのできごとは、台湾社会に深刻な傷あとを残すことになった。さらに、反共産主義の名のもとに長期にわたる弾圧がくりひろげられた白色テロ期



、しかしそうした苛烈な政治環境のもとでも民主・自由を求めつづけて今日にいたる台湾社会が「自由の花」では語られるが、この80年あまりの前期は、統治体制のトップに蒋介石が君臨していた時期でもある。常設展の入口そばには、蒋介石の2台の大きな専用車が置かれ、かれの執務室も復元されている。「中正」を記念する施設で、台湾社会が圧政とたたかってきた歴史をふりかえる展示がおこなわれているのである。



会場は大きく5つのテーマにわけられている。入口では1953年当時の情報・公安機関の組織図が書きこまれた「監視ロボット」というオブジェが来館者をむかえる。それに続く「世界浪潮」(世界の潮流)のセクションでは、第二次世界大戦後に世界各地で起こった自由を求める闘争の数々が紹介されているが、その最初に置かれているのは済州島四・三事件(1947-1954)である。ヨーロッパ・南米・アフリカのほか、アジアではマレーシアの5月13日事件(1969)、韓国の光州事件(1980)、フィリピンのピープルパワー革命(1986)、中国の天安門事件(1989)、香港の民主化デモ(2019)がならび、世界の潮流を念頭に置きながら台湾の民主化への道のりに思いをめぐらすことを参加者にうながしている。また一角には、戒厳令解除前後に反体制雑誌を発行していた鄭南榕が、1989年にみずからを拘束しようとする警察を前に抗議の焼身自死をしたときの、黒こげになった編集室が再現されている。

台湾では1949年から87年まで、実に38年あまり戒厳令がしかれていた。二つ目のセクションの「噤声年代」(沈黙期)では、国家が網羅的かつ巧妙な手段で、言論や行動の自由を抑圧していたさまがしめされる。その暴力は人々の一挙一動、生活のすみずみにまでおよんだ。ここでは、歌詞に政治的意味が暗示されているとして摘発の対象となった禁歌、夜間の外出禁止、髪型の規制、海岸線への立ち入り制限、出入国管理、「国語」(中国語)の強制、娯楽への権力の介入が、関連の公文や物品などとともに説明されている。もちろんそれらに抵触した者にはきびしい追及が待っていた。外の様子も時間の流れもわからない尋問室では、とりしらべを受ける者からは見えないところに録音機が設置され、ひとりごとをふくむ一言一句が記録されていたという。



戒厳令下でも、民主化が一応実現した後も、自由を求めるうたえは不断に続いた。第三セクションの「台湾言論自由之路」(台湾、言論の自由への道)では、二二八事件から今日にいたるまでの足跡が各年代ごとにたどれるようになっている。また、きびしい政治状況を突破すべく力をつくした7名の人物の紹介は、説明がコンパクトにまとまっていてわかりやすい。ここに登場するのは、楊逵、雷震、殷海光、傅正、康寧祥

、黄信介、鄭南榕であるが、日本統治期から作家として活躍していた楊逵、実質的な国民党一党独裁体制のもと、国民党に属さない党外勢力で中心的役割をはたした黄信介、康寧祥および上述の鄭南榕は台湾出身、一方、『自由中国』という雑誌で蒋介石をきびしく批判した雷震、傅正、殷海光は中国大陆出身で、蒋介石政権の台湾移転とともに来台した人々である。ただし鄭南榕は父親が日本統治期の後期に来台しており、みずからを大陸出身者の子どもであると称していた。

楊逵は1949年に書いた「和平宣言」(この直後の四六事件で逮捕・起訴され、1951年から61年まで、政治犯に「思想改造」を強要した緑島の施設で服役する)で、「省内外の文化界が心を開いて協力することによってこそ、この美しい土地を守り、台湾の建設を軌道に乗せ、楽園とすることができるのである」とうったえた。ここで言う「省」とは当時の台湾のことであり、日本統治期から台湾にいた者と第二次世界大戦後に中国大陆から台湾にやってきた者がともに台湾の発展のために力を合わせるよう呼びかけているのである。実際には、もともと台湾にいた人々が、政治的にも文化的にも不平等な地位に置かれることになったのだが、台湾にわたってきた人々のなかにも自由を求めてたたかい、今日でもその功績が高く評価されている人々が少なからずいる。

このセクションには、楊逵の「和平宣言」、1964年に台湾大学教授の彭明敏と学生の謝聰明、魏廷朝が「共産党による統治を受け入れず、蒋介石によって滅ぼされることにも甘んじようとしぬ人々」に向けて呼びかけた「台湾人民自救運動宣言」、米中国交樹立が近づくなかで台湾キリスト長老教会が発した「台湾キリスト長老教会人権宣言」の抜粋などもかけられている。さらにこのあたりに立っていると、「千の風になって」の歌声が聞こえてくるだろう。これは2023年に世を去った蔡焜霖が歌っているものである。蔡焜霖は楊逵とほぼ同時期、1951年から1960年まで緑島で服役した。出獄後は児童雑誌を創刊したり、出版業さらには文化事業で活躍し、晩年は鄭南榕基金会のボランティアとして日本語のガイドや翻訳にもたずさわっていた人物である。かれはこの歌を聞くと、かつて政治的迫害を受けて命を落としていった仲間たちが、今でも自分のそばに感じるのだと語っていたそうである。蔡焜霖の生涯については、游珮芸・周見信著、倉本知明訳『台湾の少年』全4冊(2022年、岩波書店)にくわしい。



白色テロで自由をうばわれ落命したり消息不明のままだった者の家族はもちろん、かりに生きのびて出獄することができたとしても、その本人や家族には苦境が待ち受けていた。暴力が被害者にもたらした肉体的・精神的な傷は、その後も長年にわたって当事者を苦しめつづける。周囲の無知や無理解、偏見、過去の暴力そのものを正当化しようとする施策や主張が被害者にふりかければ、それはなおさらの

ことであろう。「創傷」(トラウマ)のセクションでは蔡焜霖をふくむ8名の被害者の人生が映像で紹介される。広東出身で1968年に香港から台湾へわたってきたが、かつての共産主義への傾倒を問題視され終身刑を受けた梁令恵、1967年に大学進学のためマレーシアから来台したものの、身に覚えのない爆弾事件への関与を問われ、12年間、緑島などでの獄中生活を余儀なくされた陳欽生……、理不尽な嫌疑により、かけがえのない光陰をうばわれた人々の無念さは想像にあまりある。

また、獄中から家族に寄せられた手紙あるいは遺書を読む者の心を打つ。日本統治期に教育を受けた者の文面には日本語で書かれたものもある。一部の内容は、タッチパネルで中国語・英語・日本語・韓国語を選択して読むことができる。

ここには、先住民族ツォウ族で、阿里山一帯の村の村長をつとめるなど指導的役割をはたしていた高一生(ウオグ・エ・ヤタウヨガナ)の手紙が何通か展示されている。1952年9月に逮捕された直後に妻と子にあてたものには、いずれ政府もみずからの潔白がわかるはずだという希望がつつられているが、死を覚悟した1954年4月には妻に「畑でも山でも私の魂が何時でもついていきます。水田売らない様に」と語りかけていて胸をつまされる。その直後、かれは銃殺刑に処される。



拘束されてからくわしい経緯を知らされることもなく、たいせつな人を失ってしまった遺族の喪失感や絶望ははかりしれない。ここにかかっている画家陳武鎮の「消え失せた家族」という連作の一部にはその痛切な痛み、悲しみがえがかれている。陳武鎮自身も政治犯として服役した経験を持つ。上述の尋問室の説明の横にも、かれの「爪と牙」という連作の一幅がかかげられている。

最後のセクションは「綻放光華」(輝きを放つ)と題する開放的な空間である。本棚にならんでいる関連書籍を手にとり腰かけて読むこともできるし、自分の思いをしるした付せんをはりつけるボード、参観者がどこから来たのかを答えるシールアンケートもある。

あらためて、「自由の花」というタイトルにもどりたい。入口のわきやパンフレットには次のように書かれている。

世界中の自由を求める抗争で、自由をさげふ文化作品において、自由の隠喩として花がよく使われる。台湾文学の作品には頼和の「自由花」や楊逵の「潰れないバラの花」が、街頭運動にも野百合学生運動やひまわり学生運動がある。

頼和は日本の植民地支配に抵抗した文学者で「台湾新文学の父」と称される作家である。1990年の野百合運動では、多くの学生が民主化の推進や国会改革を求めて中正記念堂の広場にすわりこみ、2014年のひまわり学生運動では、中国とのサービス貿易協定に反対する学生らが国会を占拠するなどした。ここでは言及されていないが、入口上方のスクリーンにうつされている「自由の花」のイメージ映像の最後の部分には、高一生が作詞・作曲した「長春花」(フロックスの花)の一節がとり入れられている。

「自由の花」は第二次世界大戦後、すなわち日本の敗戦と蒋介石政権の來台以降を対象としているが、台湾社会はそれ以前の日本統治期から「花」を追い求めて奮闘してきた。2021年には、日本統治中期に台湾人の民族運動の拠点となった台湾文化協会の成立、また台湾での自治議会の設立を要求した台湾議会設置請願運動開始100年を記念するさまざまな行事がおこなわれた。植民地統治下での台湾人の自由への渴望が、1世紀をへてもなお、台湾社会の記憶に深くきざまれていること、そしてその花のバトンパスが1945年以降、今日にいたるまでくりかえされていることを実感しながら、じっくり参観していただきたい。

富田哲(台湾淡江大学日本語文学系副教授)